

飛騨農林事務所の普及活動状況（飛騨版）

令和3年6月25日現在

今月の重点活動

■ 水稻 中山間地域における自動運転田植機の検討

6月8日、国府町の農業法人の水田において、無人仕様の自動運転田植機による実演会が実施された。（外周を回ってマップ作成する作業は、有人で行い、安全面から外周の植付作業は有人での自動運転作業となる。）

近年、作業時間の短縮や負担軽減に役立つ各種スマート農業機械が登場してきており、水稻では、農業法人や大規模農家では、直線キープ田植機が導入されつつある。

今回、耕地整備された比較的条件の良い場所で、面積や水深の違う3枚のほ場でも正確に移植ができることを確認した。

今後も農業普及課では、効率的な水田農業の展開に向けて、導入支援や効果検証を行いながら、スマート農業を推進していく。



【正確に作業する無人田植機】

ぎふ農業・農村を支える人材育成

■ ほうれんそう 自動追尾型運搬車貸出【スマート農業】

6月18日、県のスマート農業機械・機器貸出事業を活用し、高山市久々野町のほうれんそう生産者に、自動追尾型運搬車の貸し出しを行った。飛騨のほうれんそう栽培では、収穫作業時の省力化のため、自動追尾型運搬車の利用を検討している。貸出機種は「協働運搬ロボットサウザー」と「agbee」の2種類で、収穫作業時における自動追尾型運搬車の使用方法や課題を明確にすることを目的に、2週間程度、現地実証を行うこととした。

実際に運搬車をほ場内で走行させたところ、土壌の柔らかさや遮光資材によるハウス内の暗さ、ほうれんそうやコンテナなどの障害物への反応が課題となりそうであることが分かった。

農業普及課では、実証生産者から意見の聞き取りを行うとともに、課題や使用方法についての検討を行っていく。



【自動追尾型運搬車の
実証を行う生産者】

■ ほうれんそう 高単収者のほ場環境を調べたい【スマート農業加速化実証事業】

スマート農業加速化実証事業における取組の1つに「無線通信基地局の複数機器による共同利用実証」があり、実証農家5名のほ場に環境モニタリング機器が設置している。今年度はさらに通信基地局周辺の高単収者のほ場にも環境モニタリング機器を設置し、取得したデータを実証者のデータと比較することで、高単収をもたらす要因を分析する「匠の環境調査」を実施する。

調査に先立ち、基地局からの受信範囲の確認を行った結果、予め選定した基地局周辺の高単収者のほ場でのモニタリングは可能と思われた。

今後は対象ほ場の環境を調査し、その結果を分析して栽培管理指導に役立てていきたい。



【受信範囲をチェック】

■イチゴ 現地見学会を開催（古城地域）

6月2日に、飛騨市でイチゴの栽培に取り組む池田農園において現地見学会が開催され、飛騨市、J Aひだ、地元市場関係者とイチゴ栽培に興味のある農業者が出席した。参加者は、園主から熱心に話を聞き、栽培管理等について質問していた。

今後池田農園では、暖房器具を使用した冬春イチゴの栽培やイチゴ狩り園を開設するため、様々な品種を栽培されていくとのことであった。

農業普及課では、J Aひだ営農指導員と連携しながらイチゴ栽培を支援していく。



【見学会風景】

ぎふ農畜水産物のブランド展開

■飛騨メロン 飛騨メロン研究会 現地研修会を開催しました

飛騨メロン研究会は、旧高山市・丹生川町・久々野町・国府町のメロン生産者で組織され、令和3年4月現在の会員数は16名である。冷涼な気候を活かし、夏の暑い時期に一番甘くておいしいメロンを収穫できるのが特徴である。

研究会主催の現地研修会が6月17日に行われ、丹生川町にある会員のハウスでメロンを見ながらの意見交換が活発に行われた。普及課からは農薬使用の注意点を説明した。生産者からは農薬登録に関する要望が提案されたため、今後メーカーに摘果メロンと果実メロンの希釈倍率が揃うように提言する。



【果皮の模様をきれいに出すための水管理について学ぶ若手生産者】

■古川町大豆生産組合 大豆播種作業が開始

飛騨市古川町大豆生産組合では、6月10日から大豆の播種作業が始まった。今年は例年になく梅雨入りが早かったため、準備段階から梅雨の合間を利用して播種作業が行われている。

農業普及課では、播種作業の開始に合わせて6月9日に開催された栽培研修会で播種作業時の留意点や雑草対策について研修を行った。今後も現地検討会等を通じて高品質大豆の安定生産に向けて基本技術を指導し、大豆生産への支援を継続していく予定である。



【大豆の播種作業】

■果樹 上広瀬果樹組合栽培講習会にて収穫予測情報提供

上広瀬果樹組合では、令和3年度栽培講習会を6月2日に開催した。

講習会は組合員の園地で行われ、組合長による効果的な摘果方法、せん孔細菌病の見分け方等について、実演を交えて実施された。農業普及課からは、モモの収穫予想日の提示、果樹の生育状況、せん孔細菌病の防除方法等について情報提供を行った。収穫予想日は、長野県で用いられている満開後の平均気温を変数とした収穫予測回帰式を利用し、前年と同日もしくは1日～2日遅い8月2日と予想した。

今後も当課は、果樹の安定生産に向けた技術普及や販売PRにおいて、関係機関との連携を通じた支援を継続する。



【栽培講習会の様子】

■夏秋トマト 定植作業ほぼ終了。病害蔓延防止にむけた研修会開催

丹生川蔬菜出荷組合トマト部会では、コロナ禍の中で部会員全員（130名超）を対象とした集合研修が開催困難であるため、組織内の10支部においてそれぞれ小規模な現地研修を実施している。

近年の不安定な気象条件の中、病害が多発する傾向にあり収量低下の一因となっていることから、農業普及課では病害の早期発見及び初期防除の徹底を図っている。特に被害の大きくなりやすい「褐色輪紋病」や「かいよう病」には、病徴の周知や防除対策の提案を行うなど重点的に指導している。



【参加者は相互の距離を確保】

■夏秋トマト 環境モニタリング機器の導入に関する現地研修会

「飛騨夏秋トマトスマート農業協議会」（4月に設立）では、国の「データ駆動型農業の実践体制づくり支援事業」を活用し、夏秋トマトにおけるスマート農業技術の導入にむけて実証事業に取り組んでいる。この協議会は飛騨トマト部会を主体に、各関係機関が構成員となっており、JAひだと農業普及課が事務局を務めている。

6月24日、当事業で導入する環境モニタリング機器の導入に関する研修会が行われ、実証事業に参加する生産者24戸のうち17戸が参加した。メーカーから設置方法やデータの利用方法について説明があったほか、農業普及課からは使用上の注意点などについて説明を行った。



【環境モニタリング機器の設置方法を学ぶ生産者達】

今後は、環境モニタリング機器の設置とともに各種実証試験を開始する。農業普及課では各種の調査を行い分析することで、データを活用した栽培技術の向上を図っていく。

■夏秋トマト 3Sシステム現地研修会（リモート開催）

夏秋トマト3Sシステム研究会では、システム導入者および興味のある人に向け、栽培状況について情報提供する現地研修会を6月8日に開催した。

今回は、新型コロナウイルス蔓延防止のため、中山間農業研究所からリモートで説明することとし、15名の生産者や関係者が参加した。現地で発生している萎れの状況やその対応、今後の栽培管理について注意喚起を行った。

10月にも現地研修会を予定されているため、農業普及課では生育調査を継続して行っていく。



【資料を映しながら説明】

地域資源を活かした農村づくり

■果樹 クマ被害対策の連携会議を開催

6月9日、果樹園におけるクマ被害対策の連携会議を行った。

近年、果樹園においてクマによる食害や枝折れ等の被害が多発している。特に枝折れは、翌年以降の収量にまで影響を及ぼすため、大きな問題となっている。そのため、昨年から2重の電気柵や撃退器の設置を行い、クマの侵入防止対策を強化している。

当日は、果樹生産者3名と市役所1名、普及課1名が出席し、昨年の被害状況等について確認し、今年の電気柵や撃退器の設置場所について現地検討を行い、昨年度にクマの侵入が確認された箇所について対策を強化していくこととした。

今後は、農業普及課で園内にセンサーカメラの設置や現地調査により、クマの行動把握や被害調査を行い2重電気柵や撃退器の効果を検討していく。



【クマによる枝折れ被害】